

## こんなものを読んできた(9)

～谷川健一「白鳥伝説」小学館ライブラリー、集英社文庫など～

校長 鈴木 健

今回紹介する「白鳥伝説」はファンタジーな題名ですが、中身はハードな歴史研究です。はっきり言って、高校生でこの本を読みこなせる人はほとんどいないでしょう。しかし、皆さんの中で「歴史が好き」という人がいれば挑戦してみてください。また一度読んで歯が立たなかったら、勉強して数年後に再挑戦してください。それくらいの価値はある本です。

生徒向けには表紙の写真が入りません。

中国・唐の時代(618-907年)について書かれた歴史書「旧唐書」には、日本の使者から聞いた話として「昔は小国だった日本が倭を併合した」ということが書かれています。また「新唐書」には「倭が小国だった日本を併合して国号を奪った」という説もあります。矛盾を無視してまとめると、「昔『倭』と『日本』の2つの国があったが、どちらかがどちらかを併合

した」ということになります。このことについて、これまでは中国の人の聞き違いや勘違いとしてスルーしていました。

しかし谷川健一は、ここに何らかの歴史的事実が含まれているのではないかと考えました。谷川の説では、畿内(近畿地方)に九州から物部(もののべ)氏の勢力がやって来て国を作った。そこへ九州から第二波(神武天皇ら)が来て物部氏の勢力と争い、その結果、物部氏主流(内物部)は神武天皇らと妥協して一緒に大和政権を建てた。この時、妥協を拒否して物部氏の一部(外物部)は、関東や東北地方に逃れた。そして神武天皇らの作った国が「倭(ヤマト)～日本(ニッポン)」、関東・東北に逃れた外物部の国が「日本(ヒノモト)」だったのではないかと、言います。そしてこの外物部の一族は白鳥を神や神の使いとして崇拜し、それを祀る神社や伝説を各地に残した、というのです。

日本の歴史学会では昔から関西の力が強く、そのため九州か畿内(関西)か論争があった邪馬台国も、奈良の纏向で立派な遺跡が見つかるとう畿内説が強くなりました。「神武東征」は作り話として無視し、日本の中心はずっと畿内だったとする考えが大勢を占めています。

谷川健一は大学の専門家ではなく、出版社の編集者や作家からスタートした人でした。そのせいか、その説がまじめに取り上げられることは少なかったようです。しかし、この本はいわゆるトンデモ本ではありません。膨大な文献や伝承、考古学的証拠、過去の研究などを調べつくしたうえで、説得力のある仮説として、「ヒノモト」の歴史を提示しています。

私は大学生のころ、この本を読んで非常に感銘を受けました。ガチガチな歴史研究なのに、同時にすごくロマンのある話です。しかし感動と同時に「こんなに研究しなければダメなのか、だったら、ただの歴史ファンでいいや」とへこたれてしまうきっかけにもなりました。今「歴史が好きだ」という皆さんは、私のようにへこたれず、谷川健一を超えるような面白い研究をしてほしいと思います。私はそれが本になったら、読ませてもらいますから。